

氏 名	よし だ まさ こ 吉 田 雅 子
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 302 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	中国で制作された欧州意匠の輸出用染織品の研究 ——日本に舶載された16～17世紀の作例に関して——

論文調査委員 (主 査) 難 波 洋 三 助教授 久 保 智 康 助教授 西 上 実

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、大航海時代に日本へ舶載された染織品に関して、従来欧州製とみなされてきた絹織物のなかに中国製のコピーが含まれていることを染織技法・意匠・史料の三側面から検討し、当時の日本における文化・文物の受容の一端を明らかにしようとするものである。そのために日本に伝来する10点の染織品について、材質・技法・意匠における諸特長を分析し、中国における染織品の生産や交易に関する史料を調べ、関連作品と比較を行った後、これらの作品が欧州製品を模倣して中国で制作された輸出向けの染織品であるという結論を導き出している。

第一編では、考察の対象となるビロード、縐子織物、ダマスクに関する基礎的調査の結果を提示する。ビロードに関しては、明・清代のビロード組織が明末清初に変則四枚綾組織から変則六枚縐子組織に移行したこと、欧州のビロードと異なり、地経と緯糸が染色されていることなどを明らかにする。また縐子織物とダマスクについては、狭義のダマスクが縐子組織をもつ織物であることを確認し、アメリカの織物研究者ミルトン・サンダーの研究をもとに、中国製と欧州製の五枚縐子ダマスクの組織を比較検討し、その相違点を指摘する。

第二編と第三編では、第一編の基礎的調査に基づきながら日本に伝来する10点の染織品の分析をおこなう。第二編では、従来欧州作品の代表作例と見なされてきた慶長祭服・堺市マント・伝秀吉陣羽織と、制作地が不明であった饒阿寺幔幕・知恩寺打敷・通辞羽織という、刺繍入りビロード計6点を調査分析の対象とする。まずこれらの文様表現について、大半が欧州装飾文様を下敷きにしつつも、欧州製としては不自然な表現を細部に含むことを指摘する。次に材質・技法について、中国製品の基準作である万福寺表装裂と材質・糸のつくり・織物組織などの特徴が合致すること、金糸は紙の基台に金箔を貼りつけた中国製であること、中国刺繍や中国製の欧州刺繍のコピー品に共通する技法が見られること、などを明らかにする。以上の検討により、6点のビロードは、中国において欧州製品をコピーした輸出用の品であるという見解を示し、これらが漳州・泉州・蘇州・韶州で生産された可能性を指摘する。

第三編では、メトロポリタン美術館所蔵ビロード陣羽織・伝直江兼統所用緞子胴服、および大型刺繍の西教寺打敷・本圀寺掛布の計4点の作例を検討する。メトロポリタン美術館所蔵陣羽織のビロードは、16世紀スペイン織物の文様を下敷にしたこと、文様細部に中国装飾特有の巻き込みの強い曲線や吉祥文様が見られること、中国・明清で頻繁に使用され、欧州にはほとんどなかった変則六枚縐子が地組織に使われていることを指摘する。次に伝直江兼統所用胴服は、文様が16～17世紀欧州の石榴文様を下敷きにしており、細部に明清装飾特有の巻き込みの強い曲線が認められることを指摘し、中国独自の五枚縐子組織の緞子であることを論じる。また西教寺打敷と本圀寺掛布の大型刺繍については、中国・広州で制作された「粵綉」と呼ばれる刺繍の特徴とほとんど合致することを示し、両作品が広州で制作されたものであることを明らかにする。

第四編では、16～17世紀の中国における絹織物の生産体制、中国製の輸出向け染織品の発注と生産地、中国商人の動向と交易の概況にふれたうえで、中国と日本における染織品の受容の状況について考察する。

まず中国工匠の欧州文様の受容について、左右対称の文様構成、ベッドカバーの意匠構成、天使やドラゴンなどのモテ

イーフを受け入れ模倣したことを述べる。また一方で、動物モチーフの中に、彼らがその種類や象徴の意味を理解できないものがあり、中国特有の造形観念に基づいて、一部の曲線を誇張したり吉祥文を添加したりしたことを論じている。

次に日本における染織品の受容について、中国製のコピー品を相当に含んだ舶載染織品は、すでに欧州文様本来の意味を理解できないほどに変容されている場合が多かったことを指摘する。そして、日本人は欧州の要素を直接受容したのではなく、中国人により再現された欧州要素を間接的に受容した、と結論づける。加えて、「和漢」や「和洋」といった単純な二極モデルに還元する見方自体が、文物や文化の受容の複雑な実態を見失わせてしまう危険性が高いことを述べている。

論文審査の結果の要旨

中世末から近世にかけて日本に舶載された染織品に関する従前の研究では、インド更紗や中国紋織物が主たる対象で、欧州製あるいはそれを中国でコピーしたと目される作品群の研究はきわめて少なく、それも服飾形態や文様の分析という方法に限られて、「制作地がどこか」という最も基本的な問題についてさえ、厳密な検討がなされてきたとはいえない。

本研究は、このような現状を踏まえて、欧米で先進的に行われている染織品の織物組織の顕微鏡観察に基づく織物技法分析という方法を導入し、欧州製品と中国製品の技法レベルでの客観的な識別作業を行った点が最大の特色といえる。

まず第一編で、ビロード、縐子・ダマスクの中国製品の調査結果から、欧州製品との組織の相違点を明らかにした。対象とした作品は、ビロードが合衆国、英国、スペイン、ポルトガル、オランダ、日本の美術館・博物館・団体系蔵品25点、五枚縐子ダマスクが中国、日本の博物館・研究機関・寺院蔵品28点を数える。調査先は広範な地域に及び、とりわけ作品調査が難しい中国でも本格調査を実施している。

つぎに、第二編で刺繍入りビロード、第三編で紋織物と刺繍という、日本伝来の染織品10点をきわめて詳細に分析し、これらの織物組織が中国製品の分類の範囲に属することを明らかにした。また論点は、糸の染めや撚り、金糸構造などといった材質分析、さらに刺繍技法などの同定にまで及び、観察しうるあらゆる客観証拠を動員している。

以上の検討は、所与の問題を解明しようという申請者の意欲が十分汲み取れるものである。とくに提示された作品個々の組織図と顕微鏡写真などは、これまで日本の染織史論文には見られなかったもので、方法・結論ともに、日本における東アジア染織史の研究史上、特筆すべき成果である。

第一～三編を踏まえ、第四編においては、中国における絹織物生産体制と中国・欧州間の染織品を中心とする交易の動向を探るため、欧州および中国の文献史料を博搜し分析している。とりわけオランダ東インド会社に関する史料について、公刊翻訳史料のみならず原史料にも当たることで、日本における中国・欧州染織品市場の情勢を同社がいかに把握しようとしていたか、具体的事実をいくつも発掘することができた。原典のこのように厳密な確認作業は、従前の日本工芸史研究において必ずしも徹底されている訳でなく、その意味で申請者の真摯な研究姿勢を際立たせている。

このように本研究は、日本における染織史研究における方法的に立ち遅れていた部分、すなわち織物組織の技法分析と海外史料の検証という2点において画期的な成果を挙げた。詳細をきわめた中国染織品の組織調査にくらべ、対照すべき欧州染織品のそれが不足し既研究の成果を援用するに留まったといううらみは残るものの、今後の発展的な調査・研究過程で十分補われるものと思われる。

ところで本研究の周知な点は、服飾形態や文様様式についても堅実な比較検討を併行して行い、織物組織の分析結果とのクロスチェックを図っていることである。第四編で論じたように、申請者の目的は日本・中国・欧州間の染織品の生産と流通関係、そしてその背景要因たる地域間相互の受容意識の問題解明にあるので、当然に作品の第一義的な視覚情報であるところの「意匠」がどのように表現され、変容したかを検討することは、製作地の同定、という目標以上の重要な意味をもつ。その面でも検討を加えた結果、中国における欧州文様の選択的受容と生物モチーフの含意の不理解、中国吉祥文様の追加などの事態と、日本における中国化した欧州要素の需要の実態に光を当てることが成功した。

以上のように、本申請論文は、東アジアおよび欧米の歴史・文化環境における相互交渉的関係をよりダイナミックに捉えなおすことをめざす文化・地域環境学専攻、環境保全発展論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成17年2月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。